

〈オウ・オク・オキ〉と〈ヲウ・ヲグ・ヲキ〉 霊性の発信者としての島を招き寄せるワザ(業)の啓発

菅田正昭

〈霊性〉を発信しているのは島ばかりではない。人間の場合にも、奥(オウ)としてのオウナ(嫗と奥(オキ)としてのオキナ(翁)がそうである。さらに、ヲウナ(若い女)とヲグナ(若い男)という呼称もあり、これらは奥から発信される(送り・贈り)を招くものである。島々も、霊性を発信するばかりではなく、奥(オウ・オク・オキ)の霊性を招き寄せる(ヲウ)の島として存在せねばならない。

〈奥〉の霊性からの 発信者であるオウナとオキナ

「送り」と「贈り」や、「後れ」と「遅れ」の語源が、共に〈オク(奥)〉という語から発したものであることを、前回、提示した。さらに、〈奥〉には「オク」だけでなく「オウ」の音韻もあり、その〈オウ〉は「奥」だけでなく「大」「青」……等々の義を持つ、同じくオウの音韻を持つ語に置き換えることができることも示した。そして、それ

らのコトバたちが根源語というか原初語としての《au》からの派生語である可能性も提起した。その《au》という周辺の語を冠する島々は、絶えず本土に向かって一方的に〈霊性〉を発信している。しかし、本土からの島々への距離感の認識が、「送り」や「贈り」を、空間的、時間的な隔たりとしての「後れ」や「遅れ」へと転位させてしまうのである。それは霊性の送信者としての島々の責任ではなく、受信者の側の受容性の問題なのである。すなわち、その〈霊性〉の「送り」がたとえ〈聖なる〉

「贈り」ものであったとしても、受信する側が「送れ」や「遅れ」と感じてしまったら、〈聖なる〉ものは〈賤なる〉ものへと変化してしまう。折角の「送り」＝「贈り」が台無しになってしまう。しかし、〈オウ〉²³なる鳥々は、〈聖なる〉ものが〈賤なる〉ものと受容されようが、そんなことにお構い無く〈靈性〉を一方向的に発信し続けるのである。それが〈オウ〉の鳥々の靈性の特質だ。

〈オウ・オク・オキ〉としての「奥・大・青・沖…等々」の語を冠する鳥々。その〈オウ・オク・オキ〉の関係は、鳥々だけではなく、実は、人間の関係性においても適用できる。鳥の場合と同じく、人間の場合にも、絶えず〈靈性〉を発信し続ける存在があったのである。もちろん、それが受け入れられるかどうか、は受け手の側の問題である。

そうした発信者として〈オウナ〉と〈オキナ〉がいる。すなわち、「媼」と「翁」である。単なる女性と男性の老人（高齢者）ということではなく、部族の「族母」や「族长」として人びとに慕われてきた「古老」を意味する。もちろん、あらゆる高齢者は多かれ少なかれ「媼」や「翁」になれる素質を本来、持っている。『広辞苑』には、次のように出てくる。

おうな【老女・媼・媼】（オミナの音便）年とった女。ろ
うじよ。

おきな【翁】①年をとった男。男の老人。じじ。②老人

の尊敬語。古老。③能楽の演目。④能楽の「翁」を三味線楽に改作したもの。

『広辞苑』には、この「おうな」の一つ手前に、「おうなヲウナ【女】（ヲミナの音便）おんな。」という語を置いている。しかし、『広辞苑』のように、「おうな」をオミナの音便と捉えるよりも〈オウナ〉や〈オキナ〉を『奥』の靈性からの発信者として考えたほうが、その本質が浮かび上がってくる。たとえば、〈オウナ〉や〈オキナ〉になれる素質を持った老人が、人生の中で社会的にも疎外されてゆき、折角『奥』の靈性を発信しても、その「送り」や「贈り」が無視され、あるいは、逆に「賤なる」ものとしての「後れ」や「遅れ」を場違いに流している、と思われたりして排除の対象になってしまうことがあるからだ。

奥（オウ）としてのオウナ（媼・媼）、奥（オキ）としてのオキナ（翁・叟）の視座からではないと、『広辞苑』の「おうな」と「おきな」の本質を捉えることができないのである。

ちなみに、オミナのオは尊敬・丁寧を示す接頭語、ナはオトナ（大人・乙女）などのナ（名）であろう。一方、ミはメノコ・ムスメなど女性を意味するメの母音交代系であると思われる。M行の音韻を持つ語は女性の生殖器の隠喩の場合もあり、弧状列島でもそうだが、全地球的規模でも至尊の母マヤ（マヤー）や聖母マリア、そして英語のmotherに典型的に見られるように、母性や女性性を示す

ことが多い。

「オウ(オク・オキ)からの
「送り・贈り」を招くヲウ(ヲグ・ヲキ)」

ところで、『広辞苑』が「おうな」の手前に、もう一つ別の「おうな」、正しくは「ヲウナ」を置いていることは注目される。すなわち、「おうな」には「オウナ」と「ヲウナ」の二つがあるのである。いいかえれば、「オウ」と「ヲウ」である。この関係をもっと簡略化すれば、「オ」と「ヲ」である。

現代の日本人はこのオとヲの発音の違いを表現できなくなっている。そこで、一時期、小学校では「を」を、「く」付きの「を」^レと称して教えていたようである。小学生へ教える文法としての、この「く」付きの「を」^レはとも解かりやすいが、ヲミナ(女)・ヲトコ(男)などのようにコトバの語頭にくる場合も多いので、コトバの成り立ちに興味を持つようになると、逆に頭を混乱させ、わたしもそうだったが、国語文法嫌いにさせてしまう。

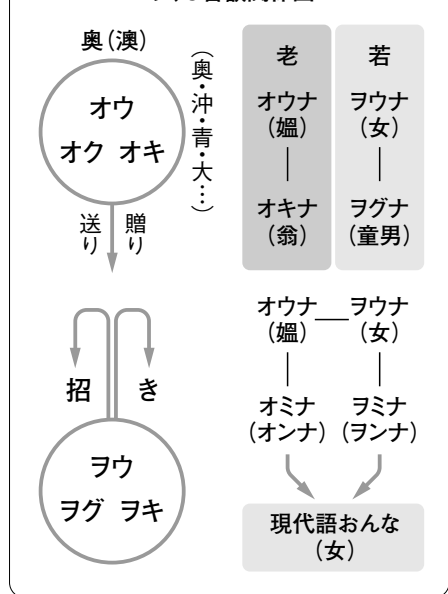
オ「[o]」とワ行のヲ「[wo]」の違いを発音できる人はあまりいない。ワ行のヲは上代仮名遣の乙類オであり、おそらく、その起源は縄文ウムラウトにある。この乙類オが口の開きが「[o]」で発音が「[e]」のときに発音するのか、「[e]」で「[o]」と発音するときのものなのか、よく判らないが、古代人にも地方差や個人差があったものと思われる。『広辞苑』

を見ると、「ヲ」は意味的には「小」である。すなわち、「[wo]」が発音しにくいので「[kwo]」↓「[ko]」となった可能性がある。すなわち、オ(大)ーヲ(小)である。

つまり、オウナ(媼・嫗)とヲウナ(女)の違いは、「老」と「若」の関係である。ただし、オとヲの大小は、魂の大きさというよりも、魂を入れておく容器の大きさの違いである。もっと厳密に言うと、魂のキャパシティーの大小である。いいかえれば、老若とは魂の完成度の差である。すなわち、オウナ(媼・嫗)とは魂が族母的に大きくなった女性、ヲウナとは魂の容器としては未完成の、いうならば発展途上の女性ということになる。

ちなみに、現代語の「おんな」は「若い女」を意味するヲウナ↓ヲミナの音便だが、その表記は「媼」を意味するオウナ↓オミナの音便のオンナになっている。やはり、少子高齢化の中で、魂の容器が大きいほうに女性は惹かれていようである。そこで、本来のヲウナを「女の子」と呼んでいる。当然、この関係性は男性の場合にも適用できる。男性の場合にはオキナ(翁・叟)がある。そうなれば、オウナーヲウナの関係からオキナに対応するヲキナの存在が想定される。ところが、ヲキナという語は存在しない。その代わり、ヲグナという語がある。「童男」の義である。まさに、女性の場合のヲウナと対になる語である。しかし、その語はヤマトタケルノミコト(記・倭建命、紀・日本武尊)

〈オウ・オク・オキ〉と〈ヲウ・ヲグ・ヲキ〉をめぐる音韻関係図



の別名の、『日本書紀』景行天皇二年(西暦三二三年)条のヤマトヲグナ(日本童男)にたった一例見られるだけである。すなわち、古代の時点ですでに埋没してしまった語である。このヲグナという、死語同然の(やまとことば)を蘇えらせたのが国文学者・民俗学者で、歌人としては釈迢空と名乗っていた折口信夫(一八八七〜一九五三)であった。折口は昭和二〇年三月、硫黄島で玉砕した養嗣子の折口春洋(旧姓・藤井、一九〇七〜四五)の御霊に己の魂を付着させ(註1)、柳田國男流に言えば「一代人」(註2)である、英霊となった若き靈魂を、ヤマトタケルのように白鳥として

旅立たせるため、歌集『倭をぐな』を上梓したのである。いうならば――。

〈女性〉(老) オウナーヲウナ(若)

〈男性〉(老) オキナーヲグナ(若)

この関係はオク(奥)から派生した(送り)〈贈り〉と、それとは真逆の位相にあるヲグ・ヲギ(ヲキ)である。というよりも、〈奥〉から発信される(送り)や〈贈り〉を受信する側の対応としてのヲグである。そのヲグとは、「招く」の義である。俳優の和訓はワザヤギ(ただし、古形はワザヤキ)だが、このヲギの場合はヲグの名詞形である。

神と人間との間に位置する

マレビトとしてのオキナ

ワザヤギの初出は、『日本書紀』の神代上第七段の、いわゆる「天石窟」の場面で、天照大神が石窟に隠れてしまったとき、アメノウズメミコト(記・天宇受賣命、紀・天鈿女命が「手に茅纏のほこ笥を持ち、天石窟の前に立たして、巧わざをに俳優あます」とあるのを嚆矢とする。すなわち、神懸りして(聖なる)ところであるオク(奥)から、ワザ(業・術・技・伎)などを招き寄せるからワザヤギなのである。

『広辞苑』によれば、「わざ・おぎ【俳優】：ヤギ(古くはワザヤキ)①手振り・足踏みなどの面白くおかしき技をして歌い舞い、神人をやわらばせしませること。また、その

人。②役者。はいゆう」とある。

ウズメは藝能の祖ということになっているが、本来、藝能には技能が含まれる。すなわち、技術のことを技藝といい、東洋でも西洋でも藝術と技術がかつて同義語であったように、それは神から与えられるカミワザ（神技・神業）だった。技術力や藝術力は未知の源泉にあるものと考えられ、そこから種々のワザを招き寄せることがワザワギだった。もちろん、その未知なる靈性の源泉を（聖なる）《オク》と捉えることが可能だ。すなわち、オク（あるいは、オキ）―ワキである。

このワキについて、『岩波古語辞典』には、「を・き【招き】《四段》神や尊重するものなどをまねき寄せる」とある。いいかえれば、〈オウ〉〈オク〉〈オキ〉から招き寄せることが（ワキ）なのである。すなわち、〈奥〉が大きな靈性を持っているからワキ寄せるのである。その関係を鳥の視座から考察していく前に、能の「翁」（註3）についてもふれておこう。

ふつう、能の「翁」は能楽の最初に演じられる一種の儀式の曲として、祝賀・正月などあらたまったとき演じられている。しかも、それは能楽師なら誰でも演じられる、というものではない。流派の宗家筋の最長老は別として、能の宗家でも自分がようやく「翁」を

舞うことができる境地に到達したと自覚できなければ、舞うことができないという。能はもともと神事に発するといわれているが、とりわけ「翁」は神事能の特色があるといわれている。

折口信夫は「翁の発生」（『古代研究（民俗学篇1）』中央公論社）の中で、この翁の出自を海の彼方から来訪する（マレビト）であり、そのマレビトが時に、神にたいして祝言を述べ、共同体の成員に向かって言祝ぐ（ことほ）（とほ）と、祝言を担っていたことを分析している。しかも、折口によれば、オキナとは、すでにこの世の人ではなく、常世にいる他界人、いいかえれば、すでに本籍は靈界にあつて、仮にこの世に来ている、というような、神と人間との間に位置する存在として考えられているのである。もちろん半分、棺桶に足を突っ込んだという存在ではないのである。能の「翁」

すがたまさあき
菅田正昭



昭和20年東京生まれ。学習院大学法学部卒業。同46年から49年まで東京都青ヶ島村役場職員、平成2年から5年にかけて同村助役を務める。主著に『日本の島事典』（三交社）、『アマとオウ―弧状列島をつらぬく日本の靈性』『隠れたる日本靈性史』（たちばな出版）、『古代技芸神の足跡と古社』（新人物往来社）、『第三の目』（学習研究社）ほか多数。現在、自身のホームページ「でいらぼん通信」で独自のシマ論を展開している。

の場合、翁が観客を言祝ぐという構造が見えており、そのことから折口が指摘したように、翁の出自がマレビトであったことが想像できる。

海の彼方から来訪するマレビトは、島を通過してきた可能性が高い。すなわち、〈オウ〉〈オク〉〈オキ〉の靈性を身に付けている。「翁」を演じる能のシテは、「翁」面を付けるため、「鏡の間」に暫しのあいだ籠る。このとき、「翁」面は神そのものとして扱われる。そして、この「翁」面を付けると、シテを演じる能楽師は神としての「翁」になるのである。そのことから、「鏡の間」を、〈オウ・オク・オキ〉の靈性が詰った空間と捉えることができる。ある種の〈シマ〉といってもよいかもしれない。「鏡の間」を、「翁」の神靈が来訪するまで《待つ》ための《マツリ》の《間》として捉えることも可能だ。

オウの靈性を ヲキ(招き)寄せる場としての島

ところで、明治時代になるまで宮中祭祀を司っていた神祇伯白川家(註4)に伝わる伯家神道には、御鏡御拝の法というのがあった。天皇陛下は自分の玉体が写った鏡に向かつて御拝をされるのである。なぜなら、鏡に映っているのは、天照大神の皇孫であるニニギ(記・邇邇藝命、紀・瓊瓊杵尊)(註5)としての現人神であるからだ。もちろん、

天皇だって生身の人間である。写り具合が悪いときは健康状態の背後にある魂に曇りがあると判断される。そのためには本来は御魂磨きとしての天皇行が課せられる。「鏡の間」にいるときの能楽師も、畏れながら 天皇陛下が御鏡御拝するときと同様の〈聖空間〉にいた、と考えられる。鏡は神へ近づいていくための、ある種のバロメーターなのである。「鏡の間」で潔斎をして心身を清め、「翁」面を神そのものとして接しながら、翁の神靈をヲキ寄せて、「翁」面を顔に付け、「鏡の間」から静々と「橋掛かり」を通じて能舞台へ出て行くとき、「翁」を舞うワザヲギの能楽師はもう「神」そのものなのだ。いいかえれば、「鏡の間」は〈オウ・オク・オキ〉の靈性の〈シマ〉であると同時に、その靈性をヲキ寄せる〈マツリ〉の〈間〉でもあった。

すなわち、オキーヲキの時空が交錯する〈間〉である。一般的に、オキナはマレビトとしての祖靈だが、オキナを含めてマレビトして来訪する神々は〈後れ〉や〈遅れ〉の、〈送り〉や〈贈り〉を持ってやって来る。能の「翁」の曲は「どうとうたりらり…」とか「どうどうたりらりらりら…」などと、ちょっと耳にしただけでは赤ちゃんが発する喃語や、神懸り直後の巫者が口にする言葉のようにも聞こえてしまう呪言から成り立っている。いうならば、オキナの登場は最も遅れた存在の顕現なのである。だがしかし、優れたワザヲギがそれを最先端の藝術の〈贈り〉ものとして、

我々の前に提示してくれるのである。このオキーヲキの關係や概念は同時に島においても適用できる。(オウ・オク・オキ)の、あるいは、【a3】周辺の音韻を島名に冠する島々は、オキーヲキの時空を共有している。ただ単に(オウ)の靈性を発信しているわけではない。そこはヲキ(招き)寄せる場でもあるのだ。島々がアイランド・テラビリーの発信地であるのは、そのためである。もちろん、発信しているだけでは駄目なのである。(オウ)の靈性をヲキ寄せる場としての島でなければならぬのである。

聖性と同時に 賤性も招き寄せてしまう島々

大島が(オウ)の島であるなら、小島は(ヲウ)の島であった可能性がある。(オウ)の靈性を招き(ヲキ)寄せる役割を持った島が(ヲウ)島だったわけである。京都府舞鶴市の大浦半島の北岸三浜の沖一五キロの若狭湾に浮かぶ冠島が大島・雄島の、その北東二・五キロの杓島が小島・雌島の別名(註6)を持つているのも、この(オキーヲキ)の視点から考えるとわかりやすいかもしれない。沖の漁場から豊漁という海の幸を招きよせるのも(ヲウ)の靈性といえるかもしれない。かつて屋久島では「トビウオ招き」と称して、「笹竹に菅笠、色布をくくりつけ、沖に向かってトビウオがたくさん寄ってくるようにと祈る」(註7)という

風習があった。これはウツナーの久高島や竹富島などで見られる注連縄を張った磯の岩の上で神女がニライカナイから豊穡を招きよせる儀式(註8)と通底しているという。もちろん、聖性は賤性へと転化しやすい。その逆も然りだが、(オウ)の靈性を(送り)(贈り)として発信している島は、時に、賤性をも招き(ヲキ)寄せてしまう。というよりも、わが国には現在一三カ所に国立ハンセン病療養所があるが、そのうち六カ所が(島)関係である。かつてハンセン病にたいする差別観が、そういう施策を国にとらせたのである。

ちなみに、その六カ所とは、次のとおりである。

邑久光明園・岡山県瀬戸内市邑久町虫明六二五三(長島)
長島愛生園・岡山県瀬戸内市邑久町虫明六五三九(長島)
大島青松園・香川県高松市庵治町六〇三四の一(大島)
奄美和光園・鹿児島県奄美市名瀬和光町一七〇〇(奄美大島)
沖繩愛楽園・沖繩県名護市子濟井出一一九二(屋我地島)
宮古南静園・沖繩県宮古島市平良字島尻八八八(宮古島)
このうち、長島には邑久光明園と長島愛生園の二つの療養所がある。前者の前身は大阪府西成郡川北村(現・大阪市西淀川区中島二丁目)にあった外島保養院である。同地は淀川水系の神崎川(別名、三国川)の支流・中島川の地にあつて、かつては三角州を形成していた。外島保養院では近隣の部落解放運動との連携も見られ、特高警察からも目が付

けられていた。そうした中で、昭和九（一九三四）年九月二
一日、室戸台風が襲撃し、患者一七三名・職員三名・職員
家族一名が死亡するという大惨事となり、昭和一三年四
月、長島の西端の現在地へ移転するのである。すなわち、
外島保養院があった場所は、観阿弥の能「江口」に象徴さ
れる賤性のシマだったのである。

一方、昭和五年、わが国初の国立ハンセン病施設として
設立された長島愛生園は、ハンセン病患者の治療に生涯を
捧げた女性精神科医神谷美恵子（一九一四～一九七九）（註9）が
通い続けたことで知られている。それらのこともあつて、
邑久の長島は福祉と反差別の聖地としての役割を持ち始め

ている。もちろん、すべての島々は、（オク・ヲキ）の靈
性を持つている、といつても過言ではない。福岡県宗像市
の沖ノ島―大島や、福岡市東区の志賀島、佐賀県呼子市の
加部島……等々をはじめ、「神々が宿る島」は多い。市内
社に限って言えば、島に鎮座する神々は全国三―三二座の
うち四％強の一三一座（註10）に過ぎないが、ここで、わ
たしがいう「神々の宿る島」とは島四国八十八ヶ所がある
小豆島や笠岡諸島なども含める概念である。そうした
「神々の宿る島」を単に靈性の発信地としてではなく、（オ
ウ・オク・オキ）の靈性を招き寄せる島として本土に提示
していかなければならないと思う。

（註）

註1..折口信夫は昭和二四年、春洋のため能登一の宮の海に近い墓地に墓を築
き、その墓碑に「もつとも苦しき／た、かひに／最もくるしみ／死にたる／む
かしの陸軍中尉／折口春洋／ならびにその／父 信夫／の墓」と刻した。

註2..柳田國男の『先祖の話』（昭和二二年四月、筑摩書房）の中で展開され
た概念。子孫を残さず戦死した若い靈魂（二代人）の鎮まる場所のことを、柳
田は真剣に考えた。

註3..拙著『隠れたる日本靈性史―古神道から見た猿楽師たち―』（たちばな
出版、二〇〇七年）を参照。

註4..白川伯王家ともいう。花山天皇の皇子清仁親王の王子延信王に発する家
系で、源姓を賜って臣下となったが、延信が神祇伯に就任したあと、代々、世
襲されたことから任伯の同時に王に復した。

註5..正しくは天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇邇藝命（記）・天饒石國

饒石天津彦火瓊瓊杵尊（紀）という。

註6..「しま」二一四号（二〇〇八年七月）の拙稿「海と島を蔑ろにしていた
日本人の精神構造」の八九〜九一ページを参照。

註7..下野敏見「海神の贈り物トビウオ」（日本人の原風景2 蒼海訪神う
み）旺文社、一九八五年）の写真「屋久島のトビウオ招き」のキャプション。

註8..同じ書で、下野氏は竹富島では旧暦八月八日、ニールン石でツカサガ、
久高島ではメーゲ石の前で、ニライカナイからのユー（豊穣）の場合、穀物）
を招きよせるといふ。

註9..「神谷美恵子著作集」（みすず書房、全二巻）もあるが、現在は「神
谷美恵子コレクション」（全五巻）が出ている。その一巻「生きがいについて」、
二巻「人間について」の中に「長島愛生園」での実践の記述がある。

註10..「しま」一九五号（平成一五年九月）掲載の拙稿「離島の式内社」を参照。